

カルパナ・サーヘニー著
『ロシアのオリエンタリズム
民族迫害の思想と歴史』
袴田茂樹監修，松井秀和訳
柏書房，2000年，338頁＋索引・原注・
参考文献74頁＋写真8頁

木村 崇

1

ロシアにおけるオリエンタリズムという歴史事象は文学研究においてはもちろん、地域研究や文化論でも、避けて通ることのできない、しかし論争必至の難課題である。評者はプーシキン生誕200年記念の国際会議にむけて『カフカーズの捕虜』について報告をまとめたときに、そのことを痛感した。正確にはその20年前、ロシア文学研究所（プーシキン館）で1年間ルールモントフ研究をしたときから、ずっと感じてきたことである。叙事詩『ムツィリ』の解釈をめぐる同研究所のある主任研究員と国境をへだてて誌上論争をしたのもその流れで起きたのだったし、ルールモントフのパラード『論争』について、当時のソ連でまかり通っていた（国定教科書的解釈と違ってよかった）説に真っ向から反対したのも、自分なりの「ロシア・オリエンタリズム」批判だったように思う。

すこしおくれて、イギリスではスーザン・レイトンがエドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』の直接の影響のもとに、カフカーズに関わった19世紀前半のロシア文学者たちを、まるでなで切りするようなロシア・オリエンタリズム批判を展開し、これがアメリカの若手研究者たちにも伝播した。スーザン・レイトンの論点は日本でも山内昌之によって、中公新書の『ラディカル・ヒストリー』第3章にほとんどそのまま転用された。記憶ではこの本について8本ほどの書評が出たが、ほとんどの評者が山内の主張を鵜呑みにして、ルールモントフやドブロリューボフを口をきわめてののしるのを見て、『現代の英雄』すらまともに読むことのできない我が国の論壇の知的素養の浅さを思い知らされた。ドブロリューボフ「批判」にいたっては、スーザン・レイトンが原文を読みこなせず、まるで正反対の解釈をしたことに端を発している。同じ内容を山内が自説を装って書いたため、皮肉にも誤謬をそのまま受け売りする形になった（木村書評、『むらぎ』12, 1993, 100-03頁参照）。ドブロリューボフの原文に当たれば簡単に分かることなのだ

が、山内自身も、あるとき書評を書いたものたちもこれに気づいていなかったのである。

ネガティブな書評は、率直に書いて書きたくない。しかし我が国の「知識人」が専門外のことになるとまるで無知をさらけ出す現状を考えると、いやなことでも、いうべきことはきちんとっておかねばならないと思ひ直さずにはいられない。第二の山内昌之が現れないとも限らないからである。インドのロシア文学者カルパナ・サーヘニーが著した本の邦訳を読みはじめて、すぐに思ったのはこのことであった。

彼女は序章でピョートル・チャダーエフを、ロシア人が他民族よりも上位に立つことのできる「選民」たる資質をそなえた民族であることを示した人物として描こうとし、「われわれは特別な民族といえるかもしれない。たしかにわれわれは人類の中では目立たない一民族にすぎないが、しかし何か偉大な教訓を与えるために、そしてそのためにのみ存在しているのである」という一文を引用している（13頁）。チャダーエフの言説全体からは妙に浮いた、異質な感じを与えるので、手元の文献を読み返してこの部分を探してみたが、けっきょく見つからなかった。もちろん『哲学書簡』は текстология の点で問題が色々あるのは知っている。原注で確かめてみると、1988年にニューヨークで出版された英語版のアンソロジーを出典にしているということがわかった。素性のあやしい文献に依拠することは、филолог としての正しい訓練を受けたものなら、けっしてしないものである。読み進んでゆくと、引用や解説のぞんざいさが目につきだす。この序章に関係するアンドレイ・イワノフの1810年の作とされる絵画が写真版で載っている。キャプションには「ドラクロアの影響が見られる」（写真編の1頁目）とあるが、ドラクロアはイワノフよりも20歳以上年下で、この絵が描かれた当時は11か12歳なのである。

これはずさんな態度の産物であろうが、ドブロリューボフからの「引用」は、ずさんなだけではすまされない。著者によれば19世紀ロシアの民主主義者と言われる人物さえも、「われわれはニグロや他の劣等人種の頭蓋と文化的な人々の頭蓋との間に存在する相違について詳述することは無駄だと考える。これらの人種においては頭蓋の上層部が奇妙な発達をしているのを知らない人がいるだろうか？ 例えばオーストラリアにおいては頭蓋の上層部がほとんどまったく存在しない場合まである。さらにこれらの人種は、知的能力の発達に関して、カフカス人種の人々よりはるかに劣等であることを知らない人がいるだろうか？」

と述べているという (51 頁)。サーヘニーはこれが 1868 年に書かれたものだとしているが、さすがに訳者は執筆年に [ママ] を付している。ドブロリューボフは 61 年に没しているからである。さてこれはいかなる出典に依るものだろうと原注をみると、レオン・ポリアコフの『アーリア神話』から引いていることが分かる。ここに「一八六八年には、ドブロリューボフのような急進主義者に次のような主張を見ることができる」(邦訳：法政大学出版局, 1985, 166 頁) とあるので、サーヘニーは何の検証もなしにポリアコフの著書から孫引きをしたということが暴かれてしまう。こちらのほうの原注では出典が, DOBROLIUBOV, Œuvres, éd. Saint-Petersbourg 1893, t. II, p. 31 (“Le développement organique de l’homme en rapport avec ses activités intellectuelles et morales”)となっている。かりにこれがドブロリューボフ自身の著作物だとしても、没後 30 年以上も経ているのでとうぜん著者自身が目を通しているはずはない。ドブロリューボフはまことに不遇な人で、ソ連で 1961 年にやっと 9 巻著作集が出るまでは、多少なりと集大成した著作集が出なかった。40 年前に専門家たちがなんとかかんとか可能な限り авторство の特定できるものを集め、本文校定をした上で出版したのである。この著作集に上記の論文は入っていないことからしても、サーヘニーが孫引きした文書の авторство は確定できないというべきだろう。

2

サーヘニーに特徴的なことは、文脈を無視してキーワードを含む部分のみを引用し、あらかじめ用意した図式にしたがって断罪するという、まことに非学問的なやり口である。一例をあげよう。彼女はベリンスキーが、クリミヤのタタール人をラクダや羊と同列視して「おなじ幹から派生した別々の種、部族を同じくする異なった枝分かれのように思われる」などと差別的言辞を弄するばかりか、言うに事欠いて「タタール人がラクダや羊よりも賢いわけではないのに、なぜラクダや羊がおとなしく連中の後をついていくのか理解できない、と付け加えている」(79 頁) として非難をあげている。これについては監修者の袴田茂樹も、「タタール人のもの凄いインテリを知っているものにとっては、たいへんショッキングな言葉である」と述べている (322 頁) が、自らゲルツェンに宛てたベリンスキーの書簡そのものを原文に当たってたしかめた形跡はないようである。

ベリンスキーは 1846 年 7 月にオデッサを訪れ、そのあとさらにクリミヤ半島まで足をのばした。問題の手紙は同年 9 月にシンフェローポリから出したものである。なぜ誤解を招くような表現が使われたかを説明するためには、7 月の手紙との関連を見ておかななくてはならない。彼は旅の途中のハリコフで、『祖国雑記』に載った彼の論文に対するスラブ主義者サマーリンの批判論文を読んだ。論敵がかなりしたたかで才走った論を展開していることにいらだちを覚えるが、サマーリンの持ち出した「柔和」とか「従順」の原理が、どうにも鼻持ちならないとゲルツェンに訴えている。そしてもう一人の論敵であるホミャコフに自分を攻撃させておいて、しっかり鼻を明かすつもりだと伝える。これが 7 月の手紙。健康状態は良くなったというが、このころは吐血しており、おまけにクリミヤに来て痔を悪化させた。そんな体調のときに現実のタタール人を目の当たりにして、ベリンスキーはキレてしまったのである。歴史上あれほどまで執拗にモスクワを襲撃し、プーシキンのロマン主義的叙事詩にも勇猛果敢な民族として描かれたあのクリミヤ・タタールが、あごひげを剃り落としてしまっていたのである。追伸でわざわざ、健康を維持して戻れるかどうかは自信がないが、あごひげだけはしっかり健在だと伝えたのは、「柔和」とか「従順」とは正反対のもの象徴だったからなのである。サーヘニーが引用した箇所後にベリンスキーは次のように書いている。「彼ら [羊も、ラクダも、タタール人も — 木村。以下同じ] は志操堅固なスラブ主義者を思わせる。しかし何たることだ！ タタール人にあっては、あの真正正銘かつ生え抜きの、東洋的・家父長的スラブ主義さえも、狡猾な西欧の影響を受けて揺らいだ跡が見えるではないか。タタールの大多数は弁髪は残しているものの、あごひげは剃ってしまっているのだ。羊とラクダばかりがコシヒン時代からの聖なる先祖の慣習をかたくなに守っているに過ぎない。自分の意見は持たず、剛胆な意志と剛胆な理性をベストよりも恐れ、氏族の年長者、すなわちタタール人をどこまでも敬って、そのお方の示す所ならどこへでも付いて行きはするけれど、そのお方がたとえ自分たちよりちっとも賢くなくても、どうして私どもをあちこちお追いなされるのですかなどと、けっして尋ねたりはしない、あの慣習である。一言でいえば、「従順」と「柔和」の原理が完璧なまでに彼らを捉えてしまっており、この点でいえば彼らの方が、シェヴィリョフ [さらにもう一人のスラブ主義者] や尊敬してやまないすべてのスラブ主義者の諸兄がメーと鳴くよりも何かもう少しは面白い鳴き方ができるこ

とだろうに」(A. И. Герцен, Собр. соч. в 30-ти томах, М., 1957, Т. 11, С. 526)。こういう、たしかに穏当さを欠いたものではあるが、辛辣な比喻をもちいた当てこすりの表現を、サーヘニーは、ラクダや羊よりも馬鹿なタタール人の後を家畜たちはなぜ付いてゆくのかと言っているとして、ペリンスキーを断罪するのである。

東洋人を動物並みに軽蔑する例を列挙したいと思った彼女は、キューヘリベケルにもその典型を見つけてしまう。「追放されたデカブリストの詩人キューヘリベケルは、ツングース人やブリヤート人を描くのに、同じような直喩を用いている」(80頁)と書いている。これも原文を覗いてみる必要があるであろう。ものは、デカブリストの乱後、シベリアへの流刑とカフカズへの転属で音信不通になっていたあと、12年ぶりにかれが旧友プーシキンに宛てた手紙である。該当すると思われる箇所を紹介したい。「…ふたつ目には、風俗や慣習がかなり散文的だからだ。言い伝えもなければ、これと目立った個性もないし、一風変わった風貌も見あたらないのだ。ブリヤート人はカフカズの山岳民と比べて、僕にははるかに好感度が低い。かれらの面構えが醜いからだが、ホフマン的にグロテスクなのじゃなくて、我が愛すべき祖国文学に出てくる、あののっぺりとして生きてるのか死んでるのか分からないようなタチのやつだ。ツングース人とはあまり出会わなかったけれど、彼らの方には何かそれらしきものがある。野獣の本源 (le principe animal) とでもいうものが彼らには強烈に発達しており、ツングース人は僕の目には「人間獣」のように見えて、計算高くて分別の発達したブリヤート人よりはるかに魅力的だ。で、ロシア人だが(遺憾ではあるが、我が友アレクサンドル、本当のことは言わなくちゃならないよな)、当地のロシア人はほとんどブリヤート人と同列で、違いはただブリヤート人の誠実さと、ブリヤート人の勤勉さがないだけなのだ…」(A. C. Пушкин, Полн. собр. соч., 1949, Т. 16, С. 85-86)。このように、キューヘリベケルの評価ではシベリアのロシア人が、ブリヤート人たちより文明・文化の点でも遅れた最低の存在なのだが、サーヘニーは彼も東洋人を蔑視している一人に加えているのである。

3

本書は「第1部 東洋蔑視の起源」(序章と「ロシアの劣等感と優越感 — 東西の狭間で」「神秘と冒険のカフカズ — ロマン主義作家と東方世界」「東洋の

亡霊 — ドストエフスキーにとっての中央アジア」「ツァーリ政府の植民地支配」の4章からなる)および「第2部 マルクス主義、ナショナリズムと民族問題」(「ロシア革命とレーニンの民族政策」「大地の冒瀆 — ソ連における環境破壊」「歴史と文化の抹殺 — ソ連の言語政策と非ロシア民族」「魂の技師 — 革命後のロシア人作家と東洋」「民族の再生 — グラスノスチとソ連崩壊」の5章からなる)とで構成されている。おおざっぱに言えば前半で10月革命以前を扱い、後半で以後を論ずるという体裁をとっている。著者のサーヘニーは専攻がロシア文学であるため、とりあげる問題も文学作品や文学者がらみの話題が豊富だが、量的には社会史、民族誌・史、政治・経済史などにかかわる話題が多くを占めている。しかしここでは本誌の性格を考慮して、文学的内容に関わる部分に重点を置いて批評することにした。

訳者あとがきによれば、著者は「デリー大学を卒業したあと六六年から七一年までモスクワのルンバ民族友好大学に学び、修士・博士号を取得した」とある。同大学の歴史・文学部に63年から68年まで在学したものとして事実をただしたいのだが、彼女が「修士・博士号を取得した」というのはまことか。最近でこそ博士号を安易に出す傾向の増加したことが問題にされているが、彼女の経歴程度で当時「博士号」を取得したというのは、客観状況からいってありえないのではないかと思う。また「修士」という学位はない。もし магистр を「修士」と呼んでいるのなら、サーヘニーの「博士号」とは「博士候補」すなわち кандидат наук のことではないだろうか。

学位にこだわるのは、文学研究者としてはあまりにも基礎的な素養を身につけていなさすぎるからである。ロシア文学専攻の学生なら常識の事実さえ彼女は知らず、支離滅裂なことを平気で書くのである。たとえば、自ら進んでカフカズへ行ったものは当初はあまりいなかったと言って、プーシキンも「いわば、カフカズへ追放されたのだった。ツァーリ政府は、遠慮なく政府高官たちについて風刺詩を書いたプーシキン^{エビグラム}を毛嫌いし、グルジアの首都に閉じ込めたのだった」(61頁)などという始末である。レーンモントフにいたっては、「レーンモントフはサンクトペテルブルグの大学で一年過ごしたあと、わざわざ近衛士官学校に入学し直した。この選択はカフカズでの戦闘に参加しなかったからだということが今ではわかっている」(70頁)、などという信じがたいでっち上げの経歴が紹介されている。かれは、モスクワ大学からの編入学という形が認められず、ペテルブルグ大学へは結局入

学しなかった。近衛騎兵部隊は文字通り皇帝の守護に当たるのが任務であるから、カフカーズ駐屯になる可能性はむしろきわめて低かった。当時の貴族にとっては、高等教育を受けて文官になったり学者を目指すよりは、軍人になるほうがステータスが高かったという文化的事実を知っておくべきであろう。カフカーズへ送られたのは、周知のとおり、第一回目はプーシキンの決闘死を悼んで書いた激烈な内容の『詩人の死』を書いて大量に流布させた行為に対する処罰措置であった。二回目はプーシキンを誹謗したとされるフランス大使の息子バラントと決闘したことが当局に知られ、軍法会議の決定によって転任を命ぜられたのであり、これも一種の処分であった。

伝記的事実の誤解はまだ許せるとしても、文学テキストの読み違いは、文学研究者としては致命的である。次のような一文に遭遇したとき、思わず目を疑った。「レールモントフがロマン主義の基本原則から離れた詩『ムツイリ』においては、主人公のグルジア人が自由を求めて、子どもの頃に入れられた修道院から逃れようとする。ここでは「文明」から「異国の地」へ逃れるのではなく、むしろそこへの帰還である」(90頁)。主人公はグルジア人ではなく、いまだ帰順を拒否して執拗な抵抗戦を続けているムスリムの山岳民の子で、エルモローフ麾下のロシア軍による平定作戦の過程でつかまった捕虜であった。負傷していたためにグルジア正教会の修道院に預けられ、修道僧になるための修行を積まされる。かれが逃亡して目指した故郷はしたがって、カフカーズの、文明化されていない山中である。レールモントフはこの叙事詩の中であきらかに、ロシアに併合され、その「庇護」のもとで一見安逸をむさぼっているように映るグルジアに対置させて、この自由を求め、ロシアへの抵抗の姿勢を崩さない山岳民の強烈な個性を形象化しているのである。サーヘニーが主人公をグルジア人だと誤解したのは、おそらく語学力不足からであろう。それをうかがわせる表現は随所に見られる。

作品の読みも、粗雑きわまりない。スターリンが唱えた「魂の技師」になるために「東洋人への全般的な傾向を描写した三人の作家」(281頁)が槍玉にあげられる。サーヘニーは「アプローチの違いこそあれ、三人のロシア人作家の作品を結びつけているのは、東洋あるいは非ロシア民族に対するあまりにも単純でしかも偏見に満ちたヨーロッパ至上主義的アプローチである。研究、ありのままの現実、客観性、異文化に対する私情を交えぬ描写や評論といった、表面的には客観的な言葉の見せかけの背後には、東洋人の墮落や野

蛮さ、後進性といったお馴染みのステレオタイプがあり、彼らは相も変わらずそれを広めているのだ」(283頁)となかなか手厳しい。彼女は序章でエドワード・サイードの研究とは目指すところが違うことを強調しているが(19頁)、この態度そのものはサイードに倣っていると言うべきだろう。違いはもっぱら両者の分析能力の差異である。

三人のロシア作家の一人アンドレイ・プラトーフは、「東洋人への侮蔑という点で、『粘土砂漠』に匹敵する作品は少ないと」批判され(284頁)、その短編『粘土砂漠』が恣意的な読みのもとに切り刻まれる。それがどんなものかお目にかけよう。「物語は、女性の扱いが牛よりも悪い一夫多妻の家庭内の獣性、残酷さ、動物的な激情を力説していく。男女の間であれ女同士であれ、人間関係は野蛮と憎悪に近いものである。プラトーフにとって、テッケ人は生活様式や信条において、また環境への無知において、野蛮な動物も同様だ。連中には魂がない、というのが基調をなすリフレンである。作家プラトーフによれば、この墮落した野蛮な部族は社会主義以外に改良の余地はない」(284-85頁)。こういう論法で文学作品から作者の「思想性」を抽出するやり方は、われわれにはおなじみである。ソ連時代の文芸評論で何度も目にした「方法」だからである。特定のイデオロギーに支配された視野には、「敵対的」で「危険」で「否定されるべき」だと思いこんでいるものに抵触するものしか目に入らず、作品を文学たらしめている美的価値などはどうでもよいのである。いや、形象としての完成度が高ければたかいほど、それは「否定的なもの」を肯定している証として、かえってひどく断罪されるのである。これは一種の「言葉狩り」であるといってよい。

プラトーフの作品の中でも評価の高い中編小説『ジャン』について、サーヘニーは「スターリンの独裁体制の完全な告発でもある」と、これを評価する立場の論理を形の上では肯定して見せるが、「しかし、まさにその論理によって、別の方向からこの作品を解明することもできる。つまり、この寓話は国家が資金提供した東洋蔑視者の視点を正当化するのに役立つだけなのだ。それは歴史を歪めることによって、決まり文句を使うことによって、そしてその選り抜かれた偏見によって、東洋蔑視者の視点を永続化するのである」(298-99頁)と反撃をする。しかし、ソ連邦史の専門家である木村英亮は、中央アジアの革命期についてのサーヘニーの「記述には多くの誤りがある」として、コカンド自治共和国、トルケスタン自治共和国、ヒヴァ・ハン国、ブハラ・エミール国、ホレズム人民

ソビエト共和国、ブハラ人民ソビエト共和国、コカンド・ハン国などの消滅・生成について詳しくこれを糺している（『歴史評論』、2000年10月、101頁）。木村は「第二部の歴史叙述には、事実の選択、記述の正確さ、分析の総合性において多くの納得しがたい点や異論があるが、ここでは一例のみ挙げた。何よりも、一定の解釈の下に、それに都合のよい事実を拾うという記述であれば、サーヘニーの批判する「ソ連史学」と同じになるのではなかろうか」と指摘している（同上）。まさにこの点に、著者の姿勢（とても「研究の」とはいえない）の特徴が凝縮している。

4

訳者は原著者の仕事を評価しつつ、「本書を一読すれば、ロシア人にとってのオリエンタリズム、とりわけ指導者や作家たちのオリエンタリズムが、まさにサイードの定義通りであったことがわかるのである。ただし、著者も本書の「序」で断っているように、サイードがオリエンタリズムを理論的に分析したのに対して、本書はサイードの構築した理論的業績を踏まえた実証分析である」とのべている（336頁）。

ほんとうにそうか。第一、サイードの仕事がもっぱら「理論的分析」であったと、どうして言えよう。かれの著作物に目を通したものなら、そんな断言はできないはずである。また、サーヘニーの「仕事」が「実証分析」というなら、合計604にもものぼる原注のうち、自らの調査検証に基づいて確かめられた一次資料によるものはどれかを示していただきたい。もしかりにそれか、それに近いものがあるというなら、どのような史料批判がなされているかを示してほしい。評者は現在、修士課程の院生たちに分担して原注の追跡調査をさせているところである。この著書は若手研究者の訓練の道具としては格好の「反面教師」であり、ロシアや旧ソ連の地域研究、文化研究、歴史研究に携わるものはかならず読まなければならないと思う。そういう意味で、本書がとてもわかりやすい日本語に翻訳されたことはまことにありがたいことである。原書がタイで出版されたという事情もあって、手に入れにくいだけになおさらそうである。

たしかに監修者がいうとおり、訳者の松井秀和はその綿密な訳注によって、誠意ある仕事ぶりを証明しているといつてよいだろう。ただし、監修者袴田茂樹は柏書房からの依頼を受けて、ロシア語にも通じている訳者を推すことにしたということだが（330頁）、これにはいささか疑問を抱かざるをえなかった。たとえ

ば「ヤースナヤ・ポリャーナ」に《「トネリコの木の草地」の意。作家トルストイの生地と同名》という訳注をつけている（273頁）が、これはясныйという形容詞をясеньからの派生語だと思ったためであろう。また、ヴァレンチン・ピークリの「ラスプーチンに関する狂信的な反ユダヤ主義小説『ウ・ポスレドネイ・チョルトウ [ママ]』」について《最後の悪魔のそばで》と訳注を付している（302頁）。形容詞がпоследнейなら名詞はчерты（線、チェルトイ）のほずで、男性名詞生格のчёрта（悪魔、チョールタ）にかかることはありえない。いずれもごく初歩のロシア語を知っていれば犯さないはずの誤りである。

評者はロシアのオリエンタリズムをきわめてゆゆしき研究課題だととらえている。サーヘニーは随所でオリエンタリズムの「ステレオタイプ化」された思考方法を批判し、還元主義や単純化された二項対立的図式に当てはめる見方を戒めているが、じつはこれはすべて彼女自身の「方法」を特徴づけるものなのである。ソルジェニーツインは《Россия в обвале》（1998、邦訳：『廃墟のなかのロシア』井桁・上野・坂庭訳、草思社、2000）において、思想的には正反対の、ロシア中心主義的な、しかし方法的にはまさに双生児というべき「ソ連崩壊後論」を展開している。この両極の、しかし同根の方法をもってしては、ロシアにおいて生まれ、広がり、そして今もしつこく根付いているオリエンタリズムを解明することはできない。ロシアは19世紀以来思想潮流のデパートの観を呈しており、「ロシア論」（かつての日本でも「日本論」が流行った。どうやらこれは世界では特殊日露的現象らしい）も多種多様なものが出ている。しかし、サイードの理論的枠組みも含め、この「ゆゆしき研究課題」を解く鍵は与えられていないといつてよいだろう。

最後に、誤解を避けるために書き記しておくが、末尾の「解説」を読むかぎり、監修者の袴田茂樹はカルパナ・サーヘニーの言説に対して、基本的な点でいくつも意見を異にしている。

（きむら たかし・京都大学）